

候。然所九日十日比より段々不宜方に御座候。十一日の朝兎角不宜候故、中村玄春老薬にいたし申候所、是にても相替申儀無之、十二日朝より以外差重り療養不相叶、終に十二日四時過歸泉仕候。貴公様御聞被成、嘸々御愁哀可被成候と奉存候。此方母初私共哀慕仕候段、御察可被下候。右御知らせ申度、乍早々如此御座候。取込早々申上候。以上。

八月十四日

室忠三郎 判

謹備

青地 禮幹

香

一 炷

祭文 用詞文

一 道

饗糕

一 箱

右專狀上拜

鳩巢先生靈筵伏惟韻納謹狀

享保十九年八月二十八日

青地 禮幹

維享保十九年歲次甲寅。八月二十八日。門下生青地禮幹。遠具香菓。謹致祭于鳩巢室先生之靈。嗚呼先生之命止於斯耶。山頽梁壞。哲人其萎。聚散消息。自古如之。遺憾復以何

加。嗚呼痛哉。惟先生學博而不雜。德尊而益輝。其知識之高妙。術業之精微。積於中者浩乎如滄瀆之無際。著於外者粲然如星辰之揚暉。沈潛於伊洛關閩之書。而獨詣自得焉。發明前脩之所未發者多矣。其於大學也有新疏。於論語也有廣義。某嘗不自量。漫成一語謂。自有四子以來。未有如集註者。自有集註以來。未有如新疏者。不啻爲朱子忠臣而已。蓋謂朱子之後一人可也。願舉世之人稀識焉者。嗚呼痛哉。屢披訃書。失聲望哭。緘辭千里寄哀一奠。嗚呼痛哉。尙饗。

一、室鳩巢の葬送

先生葬送等の儀、棺槨衣衾等迄も、無滞同門中世話被仕、當廿一日大塚新田村名主芝崎市郎左衛門と申百姓抱地の内へ葬申候。天氣能く快晴、何も致安堵候。右葬地願の儀、門弟の内恩地善三郎、幸ひ萩原源左衛門殿へ懇意に被申通候故、源左へ善三郎罷越相談被申候所、幸ひ源左衛門殿抱屋敷、大塚新田村と申所に之候間、其地内五十坪にてても三十坪にてても、入用次第に取可申旨、源左衛門被申候由。今度葬地は四十坪にて、五間に八間に候。右願の儀、門人

伊東貞右衛門と申人、兼て西丸彦坂五郎右衛門殿と申人と心安く候。貞右衛門被此世話被仕、直に被申談候所に、早速被聞届、十四日朝則西丸へ書付持参の處、御側衆へ被達之候。一兩日間有之、十八日晝過願の通に可仕候由、黒田豊前守殿、松平能登守殿列座にて、西丸御側大久保伊勢守殿へ被仰渡候由。則伊勢守殿御小納戸部屋頭大屋越前守殿へ、勝手次第に葬事等可仕候旨被申渡候旨、五郎左衛門殿より私方へ被申越候。早速願の趣達上聞、願の通被仰出難有仕合奉存候。此上の安堵御察可被下候。青地藤太夫殿へも、御物語可被下候。恐惶謹言。

八月廿四日

室忠三郎 浩謨

先生御事、何とぞ寺院の外に御永宅を御求被成度旨、年來御素願の旨承之に付、十四日迄秘喪、公儀へ相願、御門人萩原源左衛門殿抱屋敷の内、御塋城に被進候に付、右の通に御座候。林泉の形勢如何にも吉地にて、五愚皆遠かり此上の大幸と奉存候。實萩原氏私墓、公孫百姓地。御門人の内此度の大功は、第一伊東貞右衛門・第二飯室内藏助殿に御座候。其餘に何も不遺心力相勤被申候。是以平日先生御養育の効にて、當

日禮節大略家禮の趣に随ひ、遺憾も無之と奉存候。其内不作佛事條は、内藏助殿取計にて候。光岳寺へ御柩を寄申迄にて、不向柩引導、不鳴鑼鉢、不讀經、不移柩上佛殿此等の趣、寺僧と堅約無違亂、速時罷通候。初喪より穴埋に至迄、僧侶一人も近け不申相濟候。是皆内藏助殿一人の働に候。葬之以禮、庶幾萬一奉報多年の御厚恩候志迄に御座候。以上。

八月廿四日

川口庄三郎光遠